

令和元年厚真町戦没者追悼式 式辞

本日ここに、戦没者のご遺族並びにご来賓の皆様のご参列をいただき、厚真町戦没者追悼式を執り行うにあたり、戦禍の犠牲となられました御霊（みたま）に対し、厚真町民を代表して謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦が終わりを告げてから、74回目の夏を迎えました。祖国の平和と発展を願い、また家族の安泰を念じ、苛烈を極めた戦場に倒れた方々、あるいは戦後、異郷の地に残され、飢えや病に倒れ、祖国に帰ることが叶わなかった方々に思いをはせるとき、尽きることのない悲しみが胸にこみあげてまいります。

最愛のご家族を失われ、筆舌に尽くしがたい悲しみに耐えられ、立派にご子弟を養育されながら地域社会の安定、発展に貢献されてこられましたご遺族の皆様のご努力に対して、ここに深甚なる敬意を表します。

現在の日本の平和と繁栄は、戦没者の方々の尊い犠牲の上に築かれていることを、改めて私たちは正しく認識し、その使命と次世代に対する重い責任を自覚する必要があります。

近代日本が辿った紛争解決のための武力行使を深く反省し、教訓として戦争を放棄した我が国ではありますが、戦争を直接知らない世代が多数を占めるようになった今、過去の歴史に謙虚に向きあい、戦争の悲惨さと、核の功罪を明らかにし、決して人類の未来が閉ざされることのないよう、平和の尊さ、平和を堅持する智慧を次の世代にしっかりと継承していかなければなりません。

戦争の惨禍を、二度と繰り返さない。我が国の恒久平和への誓いは、昭和、平成そして、令和の時代においても決して変わることはありませんが、世界に目を転じれば、今もなお、テロや地域紛争が後を絶たず、多くの方々が傷つき苦しみの中にあります。アフリカの経済成長や国連での核兵器禁止条約の採択と朝鮮半島における非核化に向けた動きなど、新しい変化の兆しも見受けられますが、北朝鮮における度重なるミサイル発射実験、中国の海洋進出、出口の見えない中東情勢、緊張を増すホルムズ海峡情勢など、不安定要素は依然として数多く存在しています。出来うる限り民族や宗教、主義や思想の違いを乗り越え、分断から寛容の時代へと国家間の相互理解を進めていかなければなりません。

原子力科学者会報の表紙に登場する世界終末時計が、新しい令和の時代にその分針が進まぬよう、大戦の当事国であり唯一の被爆国である日本は、国際平和にさらに積極的に貢献していく必要があります。そのためには、国民的理解の広がりや民間交流の深化とともに、地域における取り組みも大切です。

来月には北海道胆振東部地震の発災から1年を迎えます。この場をお借りして、震災における犠牲者のご遺族の皆様に、改めて哀悼の意を表します。

本町は、この震災により甚大な損害を被りましたが、発災から間もない昨年11月15日には、現上皇、上皇后両陛下から励ましと労いのお言葉を賜り、現在は町民一丸となって、復旧・復興への歩みを進められているところであります。

遠く険しい道のりではありますが、戦禍で犠牲になられた戦没者から託された郷土厚真町の輝きを再び取り戻すため、町民の皆様とより一層努力を重ねてまいりますことを、ここにお誓い申し上げます。

終わりに、戦没者の御霊の安らかならんことを、そして、ご遺族の皆様のご多幸をお祈り申し上げまして、式辞といたします。

令和元年8月26日

厚真町長 宮坂尚市朗